Tokyo Union Theological Seminary

説教における「主題」についての一考察

山　口　隆　康

序

説教の分類方法のひとつに，講解説教（Homilie）と主題説教（die Themapredigt, topical sermon）の二つに分ける方法がある[1]。古くから用いられている分類法であるが，その概念，範疇が厳密に検討されている研究に未だ出会っていない。そこで拙論において，説教における「主題」とは何か，という課題について考察してみたい。

説教学は，二つの接近方法によって展開することが可能である。一つは，説教をいかにして産出するかという生成的観点であり，他は，説教を享受の観点において聴き手の立場からとらえる方法である。前者を「説教者の説教学」，後者を「会衆席の説教学」と呼ぶことができよう[2]。さて，講解説教と主題説教という二分法は，上記の二つの接近方法との関わりで検討を加えてみると，どのように整理できるであろうか。説教テキストとの関わりで分類がなされていると考えると，この分類法は，説教作成という観点からなされていることになる。説教者の立場から，説教テキストを，どのような意図において取扱っているかを表現している，と言える。講解説教と主題説教が，このように説教作成者の意図を表現した分類方法であるとすると，この二つの説教規定は，なされた説教の実態とは直接関係ないことになる。しかし，この二つの説教規定は，完成された説教の実態が，講解説教と主題説教に分類できるという考え方をもともと含んでいなかった，と果して言い切れるであろうか。この二分法的

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

説教規定に，聴き手の側から接近してみるならば，説教分類法としてたちまち矛盾が露呈することも事実である。完成された説教を聴き手の立場から分析的にとらえた場合，主題が明確な講解説教，また主題説教の形式を保ちつつ講解説教の特徴を兼ね備えている説教等を当然考えることができる。また現実に，そのような説教の存在を指摘することも可能である。このような指摘に対して分類法に工夫を加え，二つのタイプを三つに増やしたり，あるいは二つのタイプの中間的形態を設けて整理しても問題は解決しない。そもそも，このような説教分類規定が，完成された説教を観測し，分析，測定していくための範疇として用いることが可能か否かが検討されねばならない。そこで，改めて説教分析という関心から，この二概念の中でとくに多くの問題を含んでいる「主題説教」について考察を加えてみたい。そうすることにより，「説教における主題」という問題に接近したい。

そもそも説教において「主題」[3]とは何であろうか。主題の内容として，教理を主題とした説教，またキリスト教的倫理を主題として掲げた説教というように，いわゆる「主題説教」を考えることができるであろう。しかし，その場合も，教理の一項目を説き明そうと意図して作成された説教を「主題説教」と規定するのと，完成された説教を言語作品としてとらえた上で，その現実態を「主題説教」という範疇で表現する場合とでは，言葉は同じでも別の概念を規定していることになる。そこで，まず説教における主題概念が検討されねばならない。以下の論述において，まず「主題説教における主題」について論じ，次に「主題」とは何かをとらえる言語理解の検討作業を試みてみたい。第三に「説教題」とは何かについて考察を加えてみたい。

I

種々の言語テキストの中で，主題が明瞭であるのは，（自然）科学の分野の論文であろう。たとえば「ピタゴラスの数について」[4]という題の論文は，その論文が終始ひとつの主題について論述しており，その論述全体の中身が何で

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

あるか一目瞭然に理解される。この種の論文においては，通常テーマ（主題）が題目として掲げられる。題目（題名）をみただけで何が論じられているか一目瞭然でなければならない。これに対して，文学作品の場合は事情が異なる。文学作品につけられている題名が，テーマ（主題）である場合は極めて少ない。ほとんど例外と言ってよいであろう。科学的論文を要約することは可能であり，その要約を主題化したものが題名であると規定してもよいであろう。文学作品の場合は，作品を要約することは基本的に不可能である。様々に組合されたモチーフを指摘することはできる。あるいは小説などの場合，プロットとストーリーを分析的に取出すことはできる[5]。しかし，文学作品はプロットやストーリーに要約，還元できない豊かな形象の広がりを内包している。一つの主題や要約に還元できないところに文学作品の本領がある。そもそも文学的文章を読み手の側からとらえて，そこに「主題」を読み取ろうとするならば，その「主題」は多様，複雑である実態に直面し，そもそも「主題」とは何か，という問題を問わざるを得なくなるであろう。文学作品の読み取りに「主題」という概念を果して持ち込む必要があるのか，という地点まで溯って検討する必要がある。

いったい主題説教における「主題」とは何であろうか[6]。説教は，一人の説教者が，一回ごとに首尾一貫性のある言語作品を作成するのであるから，そこに「主題」が成立するのは当然であるとも考えられる。しかし，説教者が説教作成に際して胸中に抱いていた意図が，言語作品として成立した説教の叙述，演述（言葉の流れ）上に原型を保ちつつ具現化しているという保証はどこにもない。説教者の意図が統一的観念にもとづくものであっても，意図の言語表現化のプロセスにおいて，意図が言語表現上に納まるか否かは別問題であり，いわゆる＜言語の裏切り＞という現象が起こる。説教者が意図している（考えている）ことと，語られたこととの間に生じる乖離の問題である。さらに，説教作成の観点でなく，聴衆の観点すなわち享受の視点から見れば，説教者の意図は聴衆に直接知らされるわけでない。聴衆は説教者の言語からそれを聴取する

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

（読み取る）わけで，そこにも不可避的な乖離が生じてくる。このような現実の中に「主題」という課題を持込んだ場合，どうなるであろうか。説教者が，説教作成途上において目ざした「主題」と，完成された言語作品の言葉の流れ上に表われ出た「主題」の間の乖離は避けられない。さらに聴き手の立場から聴取された「主題」と，説教者が目ざした「主題」が同一である保証は何もない。とくに聴き手が聴取した「主題」の数は，単数とは限らず原理的には聴衆の数だけ考えられる。このように考えてくると，主題説教には一つの主題があるという命題は幻想であり，根拠薄弱な固定観念ということになる。

これまで，「主題説教」という曖昧な概念が，厳密な検討を経ずに固定観念として使用されてきた背景としていくつかの事が考えられるが，その一つに，礼拝説教における説教者の支配構造の存在が考えられる。説教は，聴衆の自由において聴き取られるのでなく，説教者の意図や説教者の目ざした主題に近づくことをもって「正しい聴き方」とされてきた。そこでは聴衆の課題は，説教者の支配的意図に忠実であることとなり，聴衆の責任は説教者が語ったことよりは語ろうとした意図を了解することに向けられる。説教者が感じたように感じ，説教者が感動したように感動することが，「正しい聴き方」とされるのである[7]。このような説教者の支配構造と会衆教育という戦略を想定してみるならば，主題説教における「主題」とは説教者の意図であるという命題が成り立つとも言える。しかし，この命題は，現実を無視したイデオロギー支配以外の何ものでもない。説教学における聴衆論（会衆論）の導入は，このようなイデオロギーを容易に破壊してしまうであろう。

上記のようなことを考えないとしても，ある種の説教においては，一つの主題が明確になる場合がある，という反論が考えられなくはない。説教者にとっても聴衆にとっても自ら一つの主題が明らかになる説教が考えられるのではないか，という見解である。このような考え方の背後には，論文のような論理的文章を想定し，論述の要旨が明確である説教が意図されていると考えられる。このような考え方における「要旨」とは何であろうか。そもそも「説教要旨」という概念は成立するであろうか。要するに説教は要約することができるか，

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

という問題である[8]。文学作品は，要約の不可能であることをもって自己の固有性とレーゾン・デートルを主張する。説教は，この点において自己の文学的特性とでも呼ぶべき面を放棄すべきであるとは考えられない。それでは講演と説教の差異は解消することになる。説教は要約できないことをもって説教の固有性を主張すべきではあるまいか。説教者が説教において伝えようとしたことを，もう一度伝えようとすれば，それは要約という形では伝えることはできない。もう一度語ったとおり語らねばならないであろう。もし要約で済むことを叙述，演述しているとしたら，その場合の説教とは，そもそも何であろうか。

ある種の説教ということで，もうひとつ考えられることは，全体が道徳的教訓で括られているような説教である。この場合には，神学的問題がまず指摘されることになる。道徳的教訓で括られた説教を果して福音的説教と見做すことができるか，という問題が第一に提出される。第二に福音の説き明しにおいて倫理的課題が告知される場合，福音と倫理の関係が明確にされた上で倫理的勧告がなされるべきであり，その場合の倫理的勧告は説教者の立場からの判断が唯一のものとして主題化されてよいかという疑問である。たとえば『イソップ物語』ほどに単一の倫理的教訓を叙述している文学的テキストであっても，実際には読み手によって多様な解釈の成立する余地があり，倫理的教訓も多様に読み取られる現実がある。このことから考えても，説教において説教者が単一の倫理的徳目を主題とする場合の問題は明らかであろう。このように考えてくると主題をめぐる問題は，いつでも説教とは何かという課題と結びついていることが指摘できる。

II

(1) 言語作品における主題（テーマ）という課題を検討していく上で欠かすことのできぬのは＜文学における定義＞との対話であろう。小説の形式に「thesis fiction」，「テーマ小説」という名称で呼ばれる作品があることからも検討の必要性がうかがえる。

文学用語の定義を自覚的に試みようとしたのは，文学史上「新批評（New

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

Criticism)」以後であると考えられる。そこで「新批評」に属する人々の概念規定を瞥見してみたい。

a.　ブルックスとウォーレン

「テーマとは，全物語において具体化され，その物語の各部分にまで浸透しつつ，同時に統一が保たれている人生観である」[9)]

b.　ヘイメリアンとカール

「作者は，登場人物，雰囲気，舞台，ストーリー，文体によってテーマを示している。テーマとは，文学作品全体を用いてなされる一種のステートメントであり，これをとらえるにはさまざまな理解力が求められる」[10)]

上記の二つのテーマ理解によると，それは第一に作者の人生観，態度，精神に関わるものであり，それが文学作品全体の中で具体化され，細部にまで行きわたっているもので，読者の側の理解力によって洞察される，と考えられている。ここには，文学作品においては，科学論文のように概念的命題を，作品中に示すことは全く考えられていない。主題というものを想定する場合には，作者の人生観や態度との関わりでとらえたり，読者の自由な読み取りにゆだねることを考えている。このような見解の前提となっているのは，文学作品とは何かという理解である。文学作品とは何か，という厳密な概念規定は，近代以降の文学に時代を限定しても，各文学者間に理解の相違があるであろう。しかし，文学と非文学という区別であれば，その相違は問題とならないと言える。そこで，現代の一人の文学者（大江健三郎）が，自覚的に文学（ここでは小説）とは何かを論じている文章を引用してみよう。

「あるイメージを（読み手に想像力的なものを喚起する言葉の仕掛けを），一個の暗喩から，数ページにわたる文章のかたまりのような，様ざまのレヴェルにおいて表現する。それが想像力の側面から見た，小説の具体的な書き方である。僕は，このような様ざまなレヴェルでのイメージを，小説の散文の流れのうちにはっきり分節化することを，小説の方法としたいと考えている。その分節化したイメージのブロックを，意識的に構成してゆくことを，具体的な小

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

説制作の方法とみなしたいのである。それはそのまま小説の読みとりについてもいいうることだ」[11)]

大江によれば，文学作品（小説）の構成は，言葉の仕掛けを含むひとまとまりの文章が喚起するひとまとまりのイメージを順序の軸上につないでいくことにより成立するものだと言う。この考え方は，明らかに次のような考え方を否定している。すなわち文学作品の創作手続きに次のような機械的順序を想定する考え方である。次のような図式，作者の意図⟶作品の主題⟶構想⟶叙述という手続きは文学制作の実態をとらえていない。そのような手続によっては文学作品は産出されていないのである。大江が言うように，文学的言語作品はイメージの分節化と分節化されたものの組み立てによって構成されるのであって，構成上の軸は主題などでなく，順序だてられたイメージの関係構造なのである。

このように見てくると，文学的文章と主題というテーマは，文学作品の概念規定の曖昧さと結びついていることが指摘できる。「論理的に一貫した主題によって構成された文学作品」などという言い方は，形容矛盾なのである。〈文学作品〉と〈主題〉という二者は，水と油のようになじまない概念であると言える。

(2) 説教を言語作品としてとらえた場合，説教言語にはどのような特質があるであろうか。文種という考え方がある，文の種類によって文章の本質と形式が異なる，という考え方である。解説文，記録文，報道文，観察文，日誌文……という具合に数えあげていくのである。しかし，「文種」という考え方は，もともと文章がどのような場面で使用されるのか，という使用目的から区別したもので，その文章の言語使用の実態を言語テキストのアスペクトにおいてとらえたものではない。きわめて便宜主義的分類であり，厳密には「文種」という概念は成立しない。したがって，説教という「文種」を想定し，説教言語は文章の本質と形式において他のすべての「文種」と異なるという命題は成立しないのである。言語使用場面や使用目的から溯って言語そのものの特質を論じ

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

ることはできないと言える。「文種」という概念が成立しないという事と，科学論文のような論理的文章と詩や小説に代表される文学的文章の二種類の文章があるという現実を，どのようにとらえたらよいであろうか。換言すると境界線の明確な二種類の文章とはいえないまでも，「論理的文章」と「文学的文章」という二つの傾向がある，という現実が指摘できる。説教言語の特質という観点から考えた場合，説教においては「論理的言語」と「文学的言語」が混在するかたちで用いられているように思われる。もっとも文学的文章においても同様のことは言えるのであって，極めて論理的性格の強い言語表現を意図的に用いた文学作品も存在する。また科学的論文の中にも，事象の順序，実態を詳細に描写している文章は，ほとんど写実主義的文学作品の文章とかわらない事例もある。ここで必要なことは，文学が言語との関わりにおいて自己理解を深めていったように，説教の言語的特質を，説教とは何かという課題のもとで探究していくことであろう。

ロシア・フォルマリズムの陣営のひとりであるローマン・ヤーコブソンは，言語学の立場から文学的言語の特質を次のように解明している。

「言語学との関係において詩学について要約のことばを述べるようにと，私は求められた。詩学が第一に扱う問題は，“言語メッセージを芸術作品たらしめるものは何か”である。詩学の主要課題は，言語芸術を他の芸術から，また他の言語行動から，区別するような“種差”ということであるから，したがって詩学は文学研究のうちで主位置をしめる権利を有する。

絵画の分析が絵画構造を問題にするのと同様に，詩学は言語構造の問題を扱う。言語学は言語構造一般に関する学問であるから，詩学は言語学の一構成部門であると考えることができる」[12)]

R．ヤーコブソンが，「詩学」というとき文学一般を指していると理解してさしつかえないであろう。ヤーコブソンは，この論文の中で「種差」とは何かを明らかにしていく。言語の複合的機能を分析的にとらえ，その一つとしての詩的機能 poetic function とは何かについて述べる。言語には他にさまざまな機能（関説的あるいは指示的機能，心情的機能，動能的機能，交話的機能，メ

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

タ言語機能）があるが，そのひとつが言語の詩的機能であり，このメッセージそのものへの指向を担う詩的機能こそ，文学とは何かを明らかにする鍵であると言う。言語の指示的 denotative あるいは関説的 referential 機能が，論理的文章においては支配的であるのに対して，文学的文章においては，詩的機能が支配的である，ととらえることもできるであろう。ヤーコブソンが強調するのは，言語活動には様々の構成要因が含まれており，それを言語学的コミュニケーションのモデルからとらえると，言語の機能が明らかになり，その特質が分析的に取り出せるという点である。

それでは，ヤーコブソンの業積は，われわれの課題である説教言語の検討に，どのような示唆あるいは洞察を提供してくれるであろうか。ここで，説教言語を言語の指示的機能，詩的機能との関わりにおいてとらえていくに先立って，言語表現というものの前提となっている言語観を確認しておく必要があると思われる。フェルディナン・ド・ソシュールは，言語を，記号としてとらえ，所記（signifié）と能記（signifiant）すなわち「意味されるもの」と「意味するもの」を結びつけるものは恣意的であることを指摘した。それにもかかわらず両者がわかちがたく結びつくのは，社会的約束とか習慣であるよりは，さまざまの語の連鎖，文脈がつくりだす体系にその秘密があることを解明したのである。一つ一つの語があらかじめ意味を担っているのでなく，文脈によってつくられる体系が意味を創造すると言える。言語というものが，全体的体系との対比においてその機能を発揮するということは，言語の詩的機能こそ言語の本来的機能であるという認識に立たせられることになる。文学的言語とは，言語の日常的使用の中で生命力を失った言語を新しい文脈を創造することにより，言語の本来的生命力と機能を取り戻そうとするものである。このように，もともと言語というものの実態は，言語によって対象世界の本質を提示したり，その客観的基盤を提示するというものでない。このように考えてくると，ヤーコブソンの言う，言語の詩的機能，指示的機能も，その機能を組み込まれている体系によって機能が決定されるのであり，この体系すなわち〈言葉の流れ（連鎖）〉こそ，その言語の特質を決定することになる。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

それでは，説教を言語作品としてとらえた場合，ひとつの説教の〈言葉の流れ（連鎖）〉を体系づけている特質は何であろうか。ここでは〈言葉の流れ〉を，ひとつの説教に表われ出ている言葉の連鎖，それがつくり出す体系と理解してさしつかえない。この体系を決定している特質が説教の場合何であるか。その解明が，ここで論じられるべき説教学的課題である。

ひとつの説教を形成している言語体系の特質は，どのようにとらえられるであろうか。E. ユンゲルは，キリスト教信仰における言語の特質を，徹底して隠喩的であることに見ている。

「キリスト教信仰における言語は，すべての宗教的言語がそうであるように，徹頭徹尾隠喩的である。信仰と宗教の関係は，隠喩の使用において決定されるのであって，語彙の隠喩的使用においてではない」[13)]。

ユンゲルが，キリスト教的言語の特質を隠喩の使用の中に見ようとするとき，個々の語の使用のレベルのレトリックを考えているのでなく，言述の次元あるいは語りかけの次元を考えている。ポール・リクールが，「聖書的言語における隠喩の役割と機能」[14)]について論じる場合も同様の理解に立っている。ここでは，ユンゲルの理解に立って説教という言述形態を考察してみるならば，隠喩的言述こそ説教の〈言葉の流れ（連鎖）〉を決定づけている特質とみなすことができる。それでは，説教の言葉の特質を決定づける隠喩的言述が，説教の〈言葉の流れ〉の中で，正しく神学的自己表現を獲得していく根拠はどこにあるのであろうか。ユンゲルは，罪人の義認の出来事であるイエス・キリストの生と死と復活こそ，正しい神学的隠喩形成の根拠であると言う[15)]。それは，イエス・キリストにおいて神が一度限りこの世の中へと，言語へと到来することにより，神が人間に語りかける者となってくださったからである。イエス・キリストにおける神の語りかけこそ，全く隠喩的出来事であるとも言えよう。それでは，隠喩的言述の言語としての特徴をどのようにとらえることができるであろうか。ユンゲルによれば，隠喩的言述こそ本来的言述であって，多義性，曖昧性を排除し，語りかけの次元において厳密化した言述形態であると

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

理解される。その厳密化とは，定義による厳密化，通常の論理による厳密化ではない。定義が言語による限定，固定化をもたらし，論理が語りかけるのでなく自己確定をすすめるのに対し，隠喩は言語によって解放すると言う。隠喩による厳密化とは，科学論文が自己限定，自己完結を追求することにより達成しようとする厳密化ではなく，通常の意味が破壊され，地上的固定化から解放することにより生じる厳密化である。

説教学は，隠喩的言述という視野を獲得することにより，説教言語の特性をより正確に規定することができる。説教言語は，人間世界に存在するある対象を提示，あるいは説明する言語ではない。むしろ，現実世界には確かな対象をもたず，言語的世界の中に言語の対象を作り出すのであり，その意味では文学的言語と同じ「虚構言語」と呼んでさしつかえないであろう[16]。しかし，文学作品が虚構世界を創出する「ことばの芸術」であり，「表現そのもの」に価値を置くのに対して，説教は事情を異にする。文学作品は「表現そのもの」であり，自己完結性を特徴とし，自己の外側に対応するものを持たない。説教が，もし古典的文献のひとつである「聖書」をテキストとした解釈行為にすぎないのであれば，説教言語が創出する虚構世界と文学的虚構世界とはなんら相違ないことになる。しかし，説教という行為が，礼拝において臨在したもう神を証言する言語行為として理解されるならば，言語による虚構世界の外側に対応する存在を持つことになる。説教のこの証言的性格と虚構言語が関わるのである。証言するのは，「世界内的存在」でないがゆえに，現実を概念によって写し取るような言語は用をなさない。説教において概念的言語が用をなさない理由は，説教の証言的性格に由来するのである。この点では，文学的言語が原理的に概念的言語を排除するのに対して，説教は原理的に排除するとは言えない。説教の証言的性格に矛盾しない限りにおいて，説教の中に位置を持つことは考えられる。ただし，現実を概念に置き換えるような言語は，説教言語の隠喩的特質に矛盾するので排除されることになろう。傾向としては，指示的機能を主とした言語よりも，詩的機能を主とした言語が，説教の証言的性格，また説教言語の隠喩的性格に，より合致しやすいと言えよう。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

さて，以上のような考察から，〈説教言語の特質〉と〈説教における主題〉という課題を考えてみよう。「主題」を礼拝において臨在したもうお方と考えるならば別であるが，それ以外の主題を説教に設定することは，虚構言語を基調とし，指示的機能よりも詩的機能が求められる説教言語となじまないと言えよう。さらに隠喩的言述と主題との関係を考察してみるならば，隠喩的言述が，文法上の主語の存在を特別な仕方で厳密化するのに対して，主題という概念は，この特別な仕方すなわち隠喩的に展開する言述にやはりなじまないのである。説教の証言的性格という角度から考えても，証言が，ある「事柄」を目標にするのであれば有効性を認めることができるが，「臨在したもう活ける神」を指し示すことを究極目的とすることから言えば，主題という概念を説教言語の内部に位置づけることはむずかしい課題となる。

III

説教における主題をめぐる議論の延長線上にある課題として，「説教題」について考えてみたい[17]。キリスト教会の一部に「説教には題をつけるべきでない」という主張がある。この説教題否定論者は，たいていの場合，主として講解説教 Homilie をもって説教の本来的形であると考える立場であり，そのような説教観から，「説教に題は不必要である」と主張する。説教題をめぐる議論を冷静に観察してみると，そもそも説教題とは何か，という前提が吟味されないまま，各自の固定観念に基づいて意見が述べられる場合が多い。もし，説教題が，「主題」を簡潔に提示するものであるという前提で議論するなら，「説教に題につけるべきでない」という意見は説得力をもつ。果して，説教題は，「説教の主題」との関わりでとらえるべきものであろうか。

説教題とは，そもそも何なのであろうか。もし説教の言葉が，世界の事象，現実を抽象化したり，概念化するための言語であるならば，そこにおいて認識の法則性が前提とされていることになる。この人間の認識の法則に添うように用語や概念が定義づけられていくことになる。そして，そこでは，概念や術語に揺れがないほど厳密であることになる。法律や自然科学の分野の文章を想定

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

してみるならば明らかであろう。法律文などは解釈の幅があり，解釈者の裁量で「内容」に増減が加えられることが避けられないが，究極的目標としてはいわゆる「コードのずれ」がない厳密な定義が求められるわけである。もし，説教の言葉が，このような人間の認識の法則に依拠する言語であると仮定するならば，「説教題」を「内容」との関わりで設定することは，ある程度可能であるかもしれない。その場合の「説教題」は，文学作品のタイトルなどとは性格を異にすると言える。いわゆる「教理的説教」において，教理の一項目を「説教題」として掲げ，教理の解説をもって「内容」とする説教をひとまず思い浮かべることができるかもしれない。しかしながらそのような「教理的説教」が果して成立するか，またそもそも「教理的説教」とは何かが改めて問われることになるであろう。

「説教題」について論じるためには，まず説教題とは何かという本質規定がなされなければならない。その場合，説教題を通常，説教との関わりでとらえるのが一般的考え方のように思われるが，この点が注意深く検討される必要がある。さて，説教題をとらえる場合の視野においては，説教テキスト，説教題，説教という「三者」の位置と互いの関係が重要である。説教題の本質は，説教との関わりにおいては明らかになりにくいからである。その理由は，「三者」の位置関係において明確なことは，説教題も説教も共に説教テキストを親として産み落される子供である，という点にある。したがって第一に論じられるべきであるのは，説教テキストと説教題という「親子関係」であり，第二に「説教題と説教」という「兄弟（姉妹）関係」が論じられねばならない。

説教題が産出されるプロセスから考えてみるならば，説教テキスト⟶説教者のテキスト理解（解釈）⟶説教題，という図式が考えられる。ここからの考察によって導き出すことのできる説教題理解は，結論を先取りして言うと次のようにテーゼ化することができる。

「説教題は，説教テキストを説教者の理解というプロセスを経て生成されたテキストの＜異本　Variante＞である」。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

説教テキストを「原典」とし，説教題を「異本」としてとらえ考察を加えると，ただちに明らかになるのは，「原典」と「異本」のずれである。このずれは，説教者の解釈（理解）によって生じたものである。ひとりの説教者が同じテキストで幾度かの説教を試み，そのたびに異なる説教題をつけた場合，多様な異本群が生じることになる。ひとつの原典が読まれるとき，読み手の解釈と理解というプロセスを経ることにより異本群が産出されると言える。この異本群は，テキストに内在する異本形成力と，読み手における多様な理解から生じると考えられる。異本とは，テキスト自身がもつ異本形成力と読み手の理解力によって産出されるのである。このように考えると説教題は，説教テキストが産み落す子供であると前述したが，より正確には，説教題は説教テキストを父とし，説教者の理解を母として産み落される子供であると言わねばならない。説教題をテキストの異本としてそとらえると，説教題とは説教者のテキスト理解の表現としてとらえることができる。聴き手の側から言えば，説教題を説教テキスト理解のための第一声として説教者から聴くことになる。具体例を考えてみるならば，説教題が説教テキストの一部分を抽出したケースの場合，説教者の取捨選択行為の中にすでにテキスト理解が表現されることになる。あるいは，説教テキストの一部分を変形したり付加した説教題も考えられるが，異本の基本的特徴のひとつが削除と付加であることを考え合せると興味深い。また，説教者の読みを経て，まったく独創的な説教題が考え出された場合も，この説教題をテキストの異本としてとらえることができるであろう。いずれにせよ，説教題が読み手のテキスト理解の表現であること，そこでは説教者の読みが表現されているという理解が欠落してはならないと言える。人間の理解力や創造性が積極的に位置づけられるとき，優れた「異本」，優れた「説教題」が生み出される，と言えよう。

注

1) A. W. Blackwood, The Preparation of Sermons, 1948は，Homilieをtextual sermonとexpository sermonの二種に区分し，これにtopical

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

sermonを加えて3区分している。textual sermonとexpository sermonの差異は，説教テキストの長さによる区分で，前者は短く，後者は長いテキストを扱うと考えている。晩年のKarl Barthの説教では，短いテキストが採用されているが，Blackwoodの分類に従えば，textual sermonに区分されよう。テキストが短いこともあって，テキストに即しながらバルト独特の神学的モチーフが持込まれている。神学的モチーフが発見できることと，神学的テーマが貫かれていることは区別されるべきであろう。バルトの晩年の説教の場合，次々と描き出される形象，メタアファーがモチーフと結びついており，形象をつなげていく軸を，主題と呼ぶことは適切ではないであろう。

2) 「会衆席の説教学」の理論と展開については，以下の拙論を参照していただきたい。

「説教分析基礎論」1986年，『神学』48号所収。

「説教分析基礎論II」1987年，『神学』49号所収。

「説教分析理論の展開I」1988年，『神学』50号所収。

「説教分析理論の展開II」1989年，『神学』51号所収。

「説教の聴聞について」1990年，『神学』52号所収。

「説教における説教者」1991年，『神学』53号所収。

「説教における引用の問題」1992年，『神学』54号所収。

「説教における＜内容と形成＞の問題」（上）1988年，『説教塾』2号，（下）1989年，『説教塾』3号所収。

「正典論と説教聴聞」1991年，『説教塾』4号所収。

「信仰告白と隠喩的言語」1992年，『説教塾』7号所収。

3) 「主題」という語彙を外国語に辞書的に置き換えてみるならば，筆者は，Thema，thema，subject or subject-matterを考えている。Stoff，material，contentsなどの語も考えられるが，本文中で論じているように「主題」は，どのように内容を取扱うかという説教者（作者）の態度，精神的姿勢と関わるものであると考えるからである。

4) 広辞苑（岩波書店）によれば，次のように説明されている。「$x^2+y^2=z^2$を満たす自然数の組（x，y，z）のこと。このような数の組は，直角三角形の三辺の長さとなり，無限に存在する」。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

5) 「プロットとストーリー，ロシア・フォルマリストの用語を使えば，スュジェットとファブラの違いである。ストーリーは，時間的順序に従って配列された出来事の継起である。プロットの場合，その重点は，時間的順序よりも因果関係におかれている。このように考えると，ストーリーはプロットに対して，その筋立て構成を生み出す前提としての，プレ・テクストに過ぎない，ということもできる」(『読むための理論』世織書房，1992年所収の島村輝による説明，引用箇所は84頁)。

6) ドイツ語圏における Themapredigt への関心を示す書物として次の文献が挙げられる。

Themenstudien für Predigtpraxis und Gemendearbeit, Herausgegeben von P.Krusche, D.Rössler und R.Roessler. Kreuz-Verlag.

シリーズものであるが，Band 1 が 1977 年に出版されている。Predigt-meditation のほとんどが，教会暦に従った Predigtextordnungen によって編集されているのに対し，教義的テーマと Meditation の結合を試みている。しかし，残念ながら拙論の関心である「説教におけるテーマ」とは何かという論述はなされていない。

7) この問題については，拙論「説教における＜内容と形式＞の問題（下）……説教聴聞とパラダイムの転換……」において，より詳しく論じているので参照していただきたい。この論考は，Hans Robert Jauss, Paradigmawechsel in der Liturgiewissenschaft, in Linguistische Berichite, Nr. 3, 1969における＜読み＞の理論を説教聴聞理論への刺戟として受けとめ展開したものである。

8) 説教の聴聞は，ひとつの説教全体を対象にし，言語表現の細部の聴き取りによって成立するのであって，短い「要旨」や「要約」を読むことだけで，その説教を聴いたことにはならないと言える。そうでないと，なぜ説教が虚構言語による文体を用いて自己表現しているか，その文体的価値，すなわち言語としての説教の価値が明らかにならないであろう。

9) Cleanth Brooks and Austin Warren, UNDERSTANDING FICTION-Ⅳ. What Theme Reveals, New York. 1943, p.273.

10) Hamalian and Karl, The Shape of Fiction-Five Theme, McGraw-Hill Book Company 1967, p.323.

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

11) 大江健三郎『小説の方法』岩波書店，1993年，100頁。

12) Roman Jakobson, Essais de Linguistique Générale, Paris, 1963, (邦訳)『一般言語学』川本茂雄監修，田村すゞ子他3名訳，みすず書房，1983[6]，184頁。

13) Eberhard Jüngel, Metaphorische Wahrheit, in：Methapher. Zur Hermeneutik religiöser Sprache. München, 1974, S.121.

14) Paul Ricoeur, Stellung und Funktion der Matapher in der biblischen Sprache. in：Methapher. Zur Hermeneutik religiöser Sprache, München, 1974.

15) E.Jüngel, a.a.O., S. 114.

16) J. L. Austin, How to Do Things with Words. 1962, (邦訳)『言語と行為』坂本百大訳，大修館書店，1985年。オースチンは，言語作品としての文章を二つに区分する，language of statement と language of performans である。前者は人間世界に存在するある対象を提供，もしくは説明する文章であり，後者は現実世界の何かを対象としてもたず言語的世界の中に言語の対象をつくり出す，いわゆる「虚構言語」である。詳細は，拙論「説教の言語」『説教塾』第5号，1990年所収を参照。

17) 「説教題」については，次の拙論を参照していただきたい。雑誌『形成』に連載した「説教学の手びき」第二回より第五回（1987年3月号～6月号）まで。「説教題とは何か」について命題化し，植村正久，高倉徳太郎の説教題について論じている。

NII-Electronic Library Service